

文芸

俳句

門柱の残る廃屋実南天 伊藤 敬子
 夫の留守大吟醸の卵酒 今関満喜子
 ナマケモノ炬燵の中に住んでをり 魚地 照子
 立冬の白粥あまく香りけり 江森 悦子
 枯蓮の池のほとりに鴨のむれ 鹿子木小夜子
 雑煮喰ふ空家の増えし里に住み 川島 通則
 真珠湾遙るかに昭和開戦日 向後 寛
 里隠し山ふところのお元日 越川せつ子
 ストープの鉄瓶の蓋吠えにけり 小松 藤男
 送電線尾花の景を横に切り 佐瀬 輝夫
 恙なく一族集ふ初座敷 椎名万里子
 貧富なく平等なりし初明り 鈴木とし子

真つ新な空間に待つ初日の出 土屋美枝子
 いつの日か会えると思ふ初電話 土屋 義昭

梟のリズムととのえ鳴きにけり 戸村 静華

門灯の淡きひかりや花八手 早川 勇

凧の磨き上げをる星座かな 藤田 雅夫

短歌

柗の米粒ほどの白き花 木戸のあたりにほのか匂ひぬ 水須 俊
 息ぬきに吾家に来てはおしゃべりし 女孫は今年大学受験 鈴木まさ子
 あき家となりて幾年過ぎたるや 子猫の数のぐんと増えたり 押尾 輝子
 壇林から数えて江戸へ向かふ道 「三里塚」の名今に残りぬ 西山満里子
 ひとときを太古の世へと誘はれ 埴輪の並ぶ中を歩めり 芹川 初子

初霜の朝に干したるバスタオル 陽の射し入れば水蒸気立つ 浅野 榮子

北風にかさこかさポプラ葉は 思いのままに転りゆきぬ 椎名美枝子

槇塀の間より出でし黄櫨の葉の その際だちに吾の目吸わるる 加瀬 弘子

年内の仕事じまいとらつきように 追肥ほどこし冬日傾く 青木 秀子

クリスマスに吾子より届きしCDは ビゼーのカルメン聞きて嬉しむ 田崎 尚美

.....

今夜また日本酒をのむ我はまだ がんばれるぞと八十路なりけり 越川 義則

かさかさと落葉は吾を追ひ越して 先定まらず別れゆきたり 高梨 キヨ

亡き夫の名で来る手紙思ひ出の 皆で泊りし温泉の地より 内藤 くに

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

2月 木目込みクラブ
 3月 光書道会

◎文化会館ロビー展

2月 陶芸クラブ
 3月 横芝写真クラブ

◎サビア展

2月 短歌会
 3月 水墨画クラブ

◎銚子商工信用組合展

2月 横芝写真クラブ
 3月 展示なし



早春の野に咲く青い花

立春が過ぎ、陽も暖かさを覚え、外にも春の兆しが感じられ、なんとなく心がウキウキしてくる季節になってくると、野には毎年どこかで青い花が咲きます。主に田んぼや畑の畔や北風が当たらない陽だまりなどで、株を広げて無数に咲く青い花の絨毯は、寒い冬を過ごしてきた者にとっては、ほっとして寝転がりたくなる。1cmにも満たない小さなこの花はオオイヌフグリと呼ばれ、もともとはヨーロッパ原産の越年草で、明治時代に日本に入り、東京から全国に広がったという。かわいい花に似ず、滑稽な名前である。秋に芽生え、寒さに強く早春に咲き、夏には枯れる草である。春



▲オオイヌフグリの花

の青い花といえ、最近では園芸種のネモフィラが各地で花盛りであるが、やはり子どものころから親しんだこのオオイヌフグリがいい。今年もまた春の陽を浴びながら野を逍遙し、可憐な青い花を愛で、一時の幸福を味わってはいかがか。(社会文化課 道澤 明)